

高知県のナスで発生している黒枯病菌、 すすかび病菌の SDHI 剤に対する感受性



写真1 ナス黒枯病の病徴



写真2 ナスすすかび病の病徴



写真3 薬剤添加培地による
感受性検定

高知県の施設ナス栽培では黒枯病(写真1)、すすかび病(写真2)の発生が問題となっています。現在、両病害に対して複数のSDHI剤(FRACコード7の農薬)が登録されています。これまでに本県における両病害の病原菌のSDHI剤に対する感受性は不明であったことから、複数の現地ほ場から採取した菌株を用いて調査を行いました。

黒枯病菌については、ナスに登録のあるSDHI剤のうちケンジャフロアブル、ネクスターフロアブルおよびパレード20フロアブルについて、ナス苗を用いて調査した結果、いずれの剤も防除効果が不安定でした。

すすかび病菌については、上記の3農薬とカンタスドライフロアブル、アフェットフロアブルに対する感受性を、農薬を添加した培地を用いて調査しました(写真3)。その結果、カンタス、アフェット、ネクスターに対する耐性菌が多く発生している一方で、パレードに対する耐性菌の割合は非常に低

いことが明らかになりました。また、ナス苗を用いた防除効果試験でもカンタス、アフェット、ネクスター耐性菌に対するパレードおよびケンジャの効果は高かったことから、両剤は多くのナスほ場で安定した効果を示す可能性が高いと考えられました。

効果が高い剤でも、連用すると耐性菌が増加し防除効果が低下する可能性があるため、SDHI剤に分類される農薬の使用は1作につき1回とすることが望ましいです。また、ハウス内の湿度を下げる、発病葉をハウス外に持ち出すなど、農薬による防除以外の対策と組み合わせることも重要です。

(発生予察担当 森實祐香 088-863-1132)

(現 環境農業推進課 下元祥史 088-734-0138)